人間革命

人間革命

第五巻

池田大作

聖教新聞社

人間革命

第五巻

© 1969

昭和44年10月12日　発行
昭和44年11月20日　18版　　定価380円

著者　池田大作
発行者　青木亨

発行所　郵便番号 160
東京都新宿区信濃町18
電話 東京 (353) 6111
聖教新聞社

落丁・乱丁本はお取替えいたします

印刷　明和印刷株式会社
製本　牧製本印刷株式会社

Printed in Japan

目

次

烈日 3
随喜 65
戦争と講和 136
前三後一 187
驀進 236
布石 267

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

人間革命

第五巻

装画　川端龍子

挿画　三芳悌吉

烈日

瞬間々々、時は流れる
過去、現在、未来へと――
創造と建設
敗退と惰性

その人、その国に
さまざまな運命、歴史を
渦巻きながら――

戸田城聖は、昭和三年六月、恩師牧口常三郎が教育者三谷素啓の折伏によって日蓮正宗に帰依した機会に、彼もまた師につづいて入信した。

以来、二十三年の歳月が、波瀾を巻き起こしながら流れていった。それは、思いもかけぬ、新しい宿命の波動をうけながら――。

この間――昭和五年十一月十八日には、創価教育学会を創立し、牧口の『創価教育学体系』第一巻を発刊して世に問いながら、一人の会長と一人の理事長だけで発足したのである。それから七年過ぎ、昭和十二年には創価教育学会発会式を六十余名の参加者を得て挙行し、社会的な活動は徐々に注目をあび、日蓮大聖人の仏法の真髄を学会の理念として、戦時体制の重圧のなかを地道に発展してきたのであった。

そして更に七年たった時、昭和十九年十一月十八日、牧口常三郎会長は、時の軍部政府の暴虐のために、東京拘置所の病棟の一室で、この世を去らなければならなかった。七十三歳の彼は、国家諫暁の崇高な実践の途上に倒れたのである。

その日から、また七年の月日がたっていた。そしていま、戸田城聖は、ついに創価学会会長として立つにいたったのである。創価教育学会の創設から数えて、二十一年目のことであった。

戸田城聖の会長推戴式が行なわれたのは、永遠の未来にわたって記念すべき佳日、昭和二十六年五月三日のことである。

快晴のさわやかなこの日、隅田川畔の言問橋の近くにある日蓮正宗の古刹、久遠山常泉寺には、

朝から大勢の人々が気忙しく出入りしていた。誰も彼も笑顔で挨拶を交し、話をすれば笑い声があがっていた。いそいそと門前を箒で掃く美しい娘がある。そのあとを、石畳に水をうつ逞しい青年がある。廊下を拭ききよめる婦人がいる。筆に墨をふくませて、式次第を懸命に書いている壮年がいる。どの顔にも、どの姿にも、晴ればれとした喜びが、自然とあふれていた。

正午過ぎると、あたりは急に騒がしく活きいきとしてきた。

敗戦六年目の人々の服装はまだ貧しく、晴れ着をきたものはいなかったが、常泉寺の門を陸続とくぐる人々の表情は、明るくはずんでいた。

門の傍に立つ受け付けの青年たちは、来る人々に呼びかけていた。

「ご苦労さま」

「こんにちは！　ご苦労さまです」

人々は顔をほころばせ、かるく会釈したり、ちょっと手をかざしたりして応えていく。

「おめでとう」

「おめでとうございます」

門の中の華やいだ空気とはちがって、常泉寺の周辺には、まだ戦災の傷痕が生々しく残っていた。焼け跡には、急造したバラック小屋が、ここかしこに散らばっている。焼けた大きな樹木

や、石塀などがそのまま残り、空地には雑草だらけの家庭菜園などが目についた。

このような大空襲をうけた東京の江東地区にあって、常泉寺は災害をまったく免れていたのである。その高い広大な屋根は、あたりを圧するように空に浮かんでいた。

戸田城聖は、この晴れの日のために、常泉寺以外の場所は思いつかなかった。御僧侶のなかで、創価学会を最もよく理解していた堀米尊能師が、この頃、中野の歓喜寮から常泉寺に移り、この寺の住職となっていたからであろう。

久遠山常泉寺の創建は古い。およそ三百七十年前、豊臣秀吉の朝鮮征伐の頃、文禄五年二月七日、天台僧・仙樹院日是の開基といわれている。この頃から四十二年降って、徳川三代将軍家光の島原の乱の頃、五代本行院日優は、日蓮正宗第十八世日精上人の教化をいただき、総本山大石寺の末寺となった。時に寛永十五年である。

更に七十年余を過ぎ、徳川六代将軍家宣の室・天英院の帰依によって諸堂宇が建立され、東都随一の正宗寺院として、その威容を備えるにいたった。それから約二百年の後、大正十二年の関東大震災の折りには、一部の重宝を残して灰燼に帰したが、後の第六十世日開上人が時の住職で、直ちに仮本堂・庫裡を再建し、大正十三年にはその完成をみた。

第二次世界大戦の末期には、後の六十四世日昇上人が、時の住職であった。日に日に激化す

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

る敵の空襲下にあって、上人の奮闘は絶え間なくつづけられたのである。年少の所化たちと、落下する数多くの焼夷弾を、幾たびとなく消しとめて、ついに堂宇は戦災を免れ、終戦の日を迎えた。

そして、時来たり、昭和三十七年五月十三日、寺院は今日の近代建築の様式をもって改築され、鉄筋二階建て、延べ二百二十余坪の堂宇を誇る法城となっている。

この推戴式当日の常泉寺の本堂は、学会員によって、ぎっしりと埋めつくされていた。本堂にとって、戦後はじめての大集会であったろう。その数は約千名——皆いささか興奮した面持ちで開会を待っていた。あふれた人々は、庭のここかしこに佇み、伸びあがりながら本堂の内部に眼を注いだりしている。

定刻二時——式はまず堀米尊能師を導師とする読経からはじまった。やがて唱題の声は、強く軽く清朗なリズムに乗って、快晴の果てしない天空へと吸いこまれるように消えていった。やがて唱題は終わる。

粛然とした場内に、司会の原山理事の緊張した声がひびきわたった。

「推戴の辞！　三島理事長」

三島由造は、静かに演壇へすすんだ。顔は心なしか、いくらか蒼ざめて見える。極度の緊張の

ためか、姿勢はぎこちないまでに堅い。絶大な拍手にうながされたように、三島は興奮して口を開いた。

「本日、ここに、光輝ある創価学会の全会員を代表いたしまして、戸田城聖先生を第二代会長に推戴申し上げることは、私の生涯における無上の光栄とするところであります」

三島の声は、高い調子でかすれてしまった。彼は息をつぎ、眼をとじ、そして天井を仰いで、また机上の草稿に目を落とした。

「いまや五濁乱漫、恐怖悪世の現代において、仏法の有徳王の出現こそ、われわれのひとしく渇仰するところであります。この人、いずこにありや、また誰人なるかを切に求めてまいりました。

今を去ること七年前、昭和十九年の秋、広宣流布の暁の空をはるかに望みつつ、死身弘法の壮烈な戦いの果てに、従容として霊山におかえりになった、初代会長牧口常三郎先生は、まさしく有徳王の父とも申すべき方でありました。

以来、七星霜、会長は空席のまま、むなしく過ぎてまいったのであります。

今日ほど、仏法の定義に照らし、その使命ある人の出現を焦眉の急とする時代はありません。その人、いずこにありや、凡眼は見れども見えず。ただ、牧口先生を思う時、有徳王の使命ある

は、戸田城聖先生をおいて他にあるわけはないと確信するものであります」

激しい拍手がつづいた。三島の言葉はとぎれてしまった。

「……日蓮大聖人御出現の当時と思いくらべてみるに、今日のわが国の不幸、また人類の災害の根源が、いずこにあるかは容易に理解されるところであります。すなわち、大聖人御在世の時代は、数々の誤った新興宗教の氾濫の時代でありました。今日の私どもの眼前にする社会も、またおなじく民衆を不幸においやる、新旧の邪宗教の氾濫の様相を呈しております。厳然たるこの事実を、厳粛に直視する時、わが学会の使命の重大さを、ひしひしと痛感せざるをえないのであります。

私たちが地湧の菩薩の末輩としての自覚に今日立つならば、その総帥の出現、わが学会の会長の出現を心から希求してやまないのは、久遠からの要請でなくてなんでありましょう。

創価学会再建以来、ここに七年、『戸田会長推戴賛意署名簿』に署名した、三千有八十名の同志の衷心からなる歓喜と祈願をこめて、ここに戸田城聖先生を第二代会長に推戴いたすものであります」

堂宇をゆるがすような拍手である。その嵐は、しばし止まない。待望久しかった歓喜の興奮は、いまはじめて場内を圧したのである。烈日の歓喜であった。

「……新しき大指導者、会長戸田先生の指揮のもとに、私ども全学会員は打って一丸となり、勇躍歓喜、いよいよ大折伏の敢行と、国家諫暁への邁進を誓い、本日より力強い、新たなる第一歩を踏み出そうではありませんか。もって推戴の辞といたします」

三島由造は、かつてない拍手をあび、喜び、そして驚いた。

彼は、草稿をたたみ、壇上をはなれながら、推戴の時機をなぜこんなに遅らせてしまったのかと、深く後悔に似た思いが、一瞬、頭のなかを去来するのを知った。

――なんという無駄な月日を過ごしてしまったことか。学会員が可哀想だった。この七年の空白を早急に埋めなければならぬ。

三島は、ひとり考えながら席に戻った。

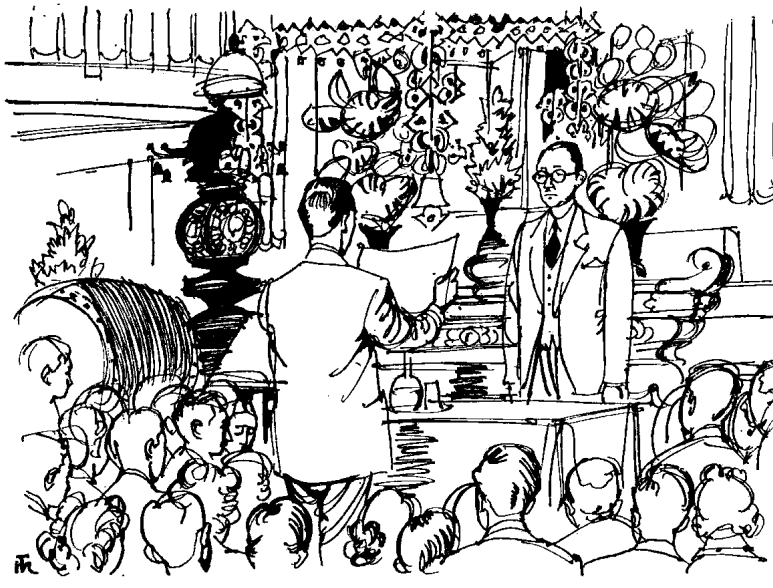
その途端、原山理事の声が凛として追いかけてきた。

「宣誓！」

三島は直ちに立ち上がり、演壇の前に直立した。この時、戸田城聖は長身の体を、壇上にはこんで立っていた。

かすかに、米軍の飛行機の爆音が聞こえてくる。

二人は、演壇の机をはさんで向かいあった。



三島は静かに、和紙に清書した宣誓文を取り出した。戸田は眼鏡の奥の瞳を光らせ、じっとそれを見ている。三島は両手をのばし、目の高さに紙片をひろげていった。紙片はかすかに震えているようである。場内は、しんと静まりかえって、固唾をのむような瞬間がきた。

「広宣流布の大業、いよいよ烈日に向かわんとするの日に当たり、われら全創価学会員は、会長戸田城聖先生の指揮を、ことごとく四大菩薩の命と拝し、ここに身命を抛つものであります！」

厳とした声である。即座に、激越な拍手が谺した。そのなかで戸田は、少しも表情を変えず、悠然と立ちながら身動きもしない。彼の頭上には、本堂の金色の天蓋がさがっていた。

三島は堅い姿勢のまま席に戻った。

戸田城聖は、演壇の縁にかるく手をおき、歓呼を託した拍手に一礼して、決意にみちた厳しい表情で場内を見わたした。

「故牧口先生のあとをついで、会長に就任いたすことは、不肖、わたくしの任に堪えるところではないが、かえりみるに、学会と立正交成会とは、おなじく正と邪の道をひらき、しかも、いまだ彼ら邪宗を潰すにいたらず――このまま便々としていては、大御本尊様よりどのようなお叱りあるかと恐れるものであります。

ここに、不思議のことあって、会長就任の決意を固めた次第である。大聖人、宗旨御建立の後、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com